

松野陽一編

向南集

古典文庫

松野陽一編

向南集

古典文庫

古典文庫第四八七冊

昭和六十二年五月二十日印刷發行

非売品

編者 松野陽一

発行者 吉田幸一

集 南 向

印刷者 白橋印刷所

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

目次

凡例	三
一向南集	五
卷第一	九
卷第二	七四
卷第三	一〇八
卷第四	一六八
卷第五	二〇六
卷第六	二三五
作者目錄	二八七
作者別索引	二九一

四	解題	三〇五
---	----	-----

五	和歌初句索引	三二七
---	--------	-----

凡例

一、『向南集』（東北大学図書館蔵、狩四・一〇五三〇・一）を底本として翻刻した。

二、漢字・仮名の別、仮名遣い、送り仮名等はすべて底本のままとしたが、漢字の字体はおおむね通行字体に従った。なお、通読の便宜のため、序・詞書・左注、作者目録注記には句読点を施した。

三、便宜のため和歌に一連番号を付した。

四、作者別索引は、本文表記が「守躬」「もりみ」の如く漢字・仮名表記が混用されているので、漢字の音よみに統一し、五十音順（同音順数順）に配列した。ただし、「まさしげ」の漢字表記は不詳なので、「ませ女」と共に原則外の処置を採った。また、「一指」「単斎」「長保」は同一人物であるが、表記通り区別して掲出した。歌人名の直後の洋数字は総歌数、漢数字は歌番号である。

五、翻刻許可をいただいた東北大学附属図書館に御礼を申しあげる。なお、本書

は昭和六十一年度科学研究費補助金（一般研究C）による研究成果の一部である。

昭和六十一年八月

松野陽一

向南集全

(外題)

このとしころ向南亭のむしろにはし居して人／＼のよめる歌なにく
れとかいあつめてうちなかむれは、花のかけ月のまとゐのこゝちして、
春の日のなかきも暮やすく、秋のよの明やらぬ寝さめの友とそなりぬ。
しかあれと、我かしれることのおほからねは、師に乞、友にもとめ侍
る中に、こふなむていのさかんなりしは文化・文政・天保のころにそ
ありける。その人ひともいまはむかしとなりて、その名のみかすかに、
ことの葉も散ちりになり、おほく残れるはまれになん、いとわひしき
わさに侍れは、なをかた／＼にもとむれとも、ひめをきてゆるさぬも
あり、あるはうけかひてはたさぬはちからなく、さてやみぬ。この三
と¹ 1ウ せあまりあつめしを、師のえらひを乞ふて、向南集となして
ととめをく。おなしこゝろの友のもとに残しなは、松のはの散うせす、

呉竹のよゝをへて此道をたとる人もあらは、今の世のおもかけをしのふなかたちともなりなんと、嘉永二つの冬

一溪しるす

(五行分空白)

(一丁分空白)

┌ 二
└ 二
ウ オ

向南集 卷第一

春歌

としのうちに春たちける日よめる

少将定信朝臣

一 春はきぬとしはこなたに残るとや雪けに霞むあり明の月

年内立春

正敦朝臣

二 青柳のみとりにかへる春くれと猶くりはてぬ年のをた巻

法印季文

三 あら玉のとしは内外もなかりけり冬さく梅にはるのはつ風

四 としのうちは幾日もあらぬ日数とやかこちよせても春の立らん

守躬

「 3 才

五 待行む心になふ年なれや日かすのこりて春は来にけり

良敬

六 暮残るとしの梢のはつ花に春もけふこそほころひにけれ

立春

法印季文

七 君か代はいつもならひの長閑さをさらにもみするけさの春かな

嘯山

八 雪氷とけもとけすも今日よりの春そまことの春の初かせ

海辺立春

弾正少弼長保

九 治まれる御代の恵もみつの浦の汐路長閑にはるやたつらん

秀実

一〇 難波かたあしやの軒もしめはへて春の外には立なみもなし

「3ウ

湖上立春

法印きふん

二 あふみのや八十の湊による船のいくらの春をつみてきつらむ

処々立春

三 来る春はひとつ霞のうちなれは都のふしもちかのしほかま

三 かすみけり春は雲井をはしめにて浅間のけふりふしのしら雪

春風春水一時来

三知

一四 氷るし硯の水もうちとけて筆のはやしに春風そふく

寒過春来

よしゆき

一五 山の井の小笹かもとの霜はしら立かはりてもかすむころ哉

本卦かへりといふとしの春に

三知
「4才

一六 六十あまりけふ立かへるあら玉の年をひとつとかそへそめつる

元日

法印きふん

一七 松のはのいつともわかぬ住家まで千代をはけふと祝ふ春哉

一八 ひとつせをはるかにおもふけふしこそ身のをこたりの初めなりけれ

藤原利邦

一九 たゝ一夜あくれば春のけしきかなしめ引門のなよしひるらき

しやう山

二〇 春のくるうれしさのみかめつらしき人にもけふはとはれぬるかな

二一 蓬生の宿もへたてす来にけらしけふあら玉の春と老とは

元日つとめて、大城に拝賀して

法印季文
「4ウ

三 明わたる春のみとのゝ松風は君にことふく千世の声かな

元日、向南亭にまかり出ければ、鶯の声のにほひをま

つ宿に先こそきつれことのはの友、と聞え給ふに 良敬

三 ことの葉の花さく宿をしたふのみ我鶯におとらさりけり

試筆 少将定信朝臣

二 朝かすみ立出みれはたか門もまつと竹との春のはつ風

二 だけ芝のうらのみるめも長閑さも千世とそいのる我君の為

弾正少弼長保

二 窓の雪もかつとけ初てとる筆のほにあらはるゝけさの春風

しやう山
5才

二 一夜明てけさくむ酒はあら玉のことしのゑひのはしめ也けり

早春

二 言のはの筆のはやしの春風にすゝりの海もこほりとくらし

早春天

よしゆき

元 さほひめのひれふる袖も春たちて薄紫のよこ雲のそら

早春山

法印季文

三 きのふまで霜になひきし笹のはの太山もそよと春風そふく

良敬

三 みよしのゝみふねの山も春のきてほのかにかすむ瀧のうへかな

藤原忠賢

三 打むれて子曰せよとや小塩山小まつか原もけさかすむらむ

「5ウ

弾正少弼長保

三 窓のとを明れはかすむ不二の根の雪も時しる春のはつかせ

空

名所早春

しやうさむ

三 よしの山こそ枝折のあともなし道ふみかへて春やきぬらん

早春鶯

藤原利邦

三 水にすむ蛙やいつらうすらひの先とけ行はうくひすのこゑ

早春柳

法印きふん

三 青柳の雪けの露の玉かつらかけてやをのか春をしるらん

初春

藤原資始

三七 待えたる人のこゝろの初花やけふたち初るはるにさくらん

初春霞

尾張重相君より
題給はりければ

法印季文

六才

三六 朝霞たち初にけり春はけふきそ山かせもゆるく吹らむ

初春山

よしゆき

三九 佐保姫の霞の袖にくりためよはるくるみねの滝のしらいと

初春祝君

しやう山

四〇 小松引わかなもつみぬ君が世に千世もといはふ春のものとして

難波津にて春立日よめる

源久樹

四二 ふる郷につけはやけさは難波なる春を見きとも又あひきとも

春のはしめのうた

しやう山

四三 子曰せし昔の松を数に見て若なもつまぬ老のはるかな

藤原利邦